

【実践報告】

人間福祉学科におけるキャリア教育の実践と評価について

河内 佑美・太原 牧絵・坂井晶子
Yumi Kouchi・Makie Tahara・Akiko Sakai

キーワード： 就職支援 満足度向上 将来像 検証方法 実践報告

1. はじめに

内閣府は「若者の仕事観や将来像と職業的自立、就労等支援の現状と課題」と銘打ち、2011年12月から2012年1月にかけて全国の15歳から29歳までの男女3,000名（男性1,500名、女性1,500名）を対象にした調査を行っている。その結果、「キャリア教育・職業教育を受けたことがある」というものは全体の25.5%に留まり、「受けたことはない」と回答したものは64.2%にもものぼった。この調査結果は、若者の仕事観や将来像を具体化するためには、キャリア教育・職業教育が必要であることを示唆している。

本学人間福祉学科は、BMS（Bunkyo Management System）の取り組みテーマとして2019年度より「就職支援に対する満足度向上のための施策の策定と実施・検証」を実施している。本来の計画では、人間福祉学科に所属する学生に実習やボランティア、人間福祉学会の参加を体験させ、その前後で就職に対する関心の変化を調査する予定であった。しかし、COVID-19感染症の拡大によって学会や実習の規模縮小を余儀なくされ、ボランティアに至っては学生に推奨するどころか参加を控えるように呼びかける状況であった。他方、上述した調査結果が示すように、若年層にあたる大学生へのキャリア教育・職業教育は重要であり、感染症対策を講じたうえでの施策が求められた。このような状況を鑑み、我々は現役の福祉専門職をゲストスピーカーとして招くかたちで講義形式のキャリア教育を企画した。

いうまでもなく、福祉専門職の活動領域は多岐にわたる。そのため同じ専門職であっても、地域福祉・高齢者福祉・児童福祉・障害者福祉・医療福祉等の分野によって業務内容が大きく異なっている。つまり、ひと括りに「福祉専門職」といっても、学生はその具体的な職業イメージをもつことが難しい。

そこで、溝口ら（2020）が述べる「ロールモデルを持つことが職業像の形成につながる」という知見に着目し、大学生にとってロールモデルとなる現役の福祉専門職から講義を受けることで、学生のキャリアに対する関心を向上させたいと考えた。大学1年生の段階でロールモデルを持たせることによって、福祉専門職の具体的な仕事内容を理解させ、将来の職業像を鮮明にすることが期待できる。また、それに伴って学習意欲の向上を図ることができるかもしれない。さらに大学4年生にとっては、福祉専門職の具体的な仕事内容を把握することにより、進路に関する意思決定を促進させることができるだろう。そこで本稿では、地域包括支援センターの業務や役割についてゲストスピーカーから講義を受けた1年生と4年生に行ったキャリアに関する理解度や関心度の変化について調査した結果を報告する。

II. 方法

(調査対象)

調査対象者は広島文教大学人間科学部人間福祉学科に所属する1年生54名と4年生56名であった。

(調査期間)

調査は2022年5月30日から同月31日にかけて行った。具体的には2022年5月30日に1年生、翌日に4年生を対象に調査を行った。

(調査方法)

講義の前後で、調査対象者にMicrosoft formsで作成したアンケートフォームを配信し回答を求めた。

(調査項目)

・講義前

①現在、関心のある職場(分野)。複数回答可(高齢者福祉・児童福祉・障害児者福祉・精神障害者福祉・地域福祉・医療福祉・司法福祉・その他)

②現在、関心のある職種。複数回答可(保育の仕事・介護の仕事・相談援助の仕事)

③地域包括支援センター(社会福祉士)の仕事を理解しているか。(全く理解できない・あまり理解できない・少し理解できている・理解できている・とても理解できている)

・講義後

①本日の講義を聴いて、関心のある職場(分野)に変化はあったか。(はい・いいえ)

②本日の講義を聴いて、現在関心のある職場(分野)。複数回答可(高齢者福祉・児童福祉・障害児

者福祉・精神障害者福祉・地域福祉・医療福祉・司法福祉)

③本日の講義を聴いて、関心のある職種に変化はあったか。(はい・いいえ)

④本日の講義を聴いて、現在関心のある職種。複数回答可(保育の仕事・介護の仕事・相談援助の仕事)

⑤地域包括支援センター(社会福祉士)の講義を聴いてどのくらい仕事を理解できたか。(全く理解できない・あまり理解できない・少し理解できた・理解できた・とても理解できた)

⑥地域包括支援センター(社会福祉士)の講義を聴いてもっと深く知りたいと思ったか。(はい・いいえ)

⑦質問6で「はい」と答えられた方は、知りたい内容を記入。

(倫理的配慮)

調査実施前に研究の趣旨、目的、個人情報の扱い、回答への協力は自由意志であることについて口頭で説明した。

III. アンケート結果

1) 4年生

①関心のある職場(分野)について講義前後 ※複数回答

・講義前

回答者数は53名であった。関心のある分野は、高齢者福祉分野27名、児童福祉分

野 23 名、障害者福祉分野 22 名、精神障害者福祉分野 13 名、地域福祉分野 25 名、医療福祉分野 11 名、司法福祉分野 1 名、その他 0 名であった。

・講義後

回答者数は 49 名であった。関心のある分野は、高齢者福祉分野 24 名、児童福祉分野 20 名、障害者福祉分野 17 名、精神障害者福祉分野 13 名、地域福祉分野 35 名、医療福祉分野 12 名、司法福祉分野 1 名、その他 0 名であった（図 1）。地域包括支援センターの専門分野である地域福祉分野への関心度が向上している。

3

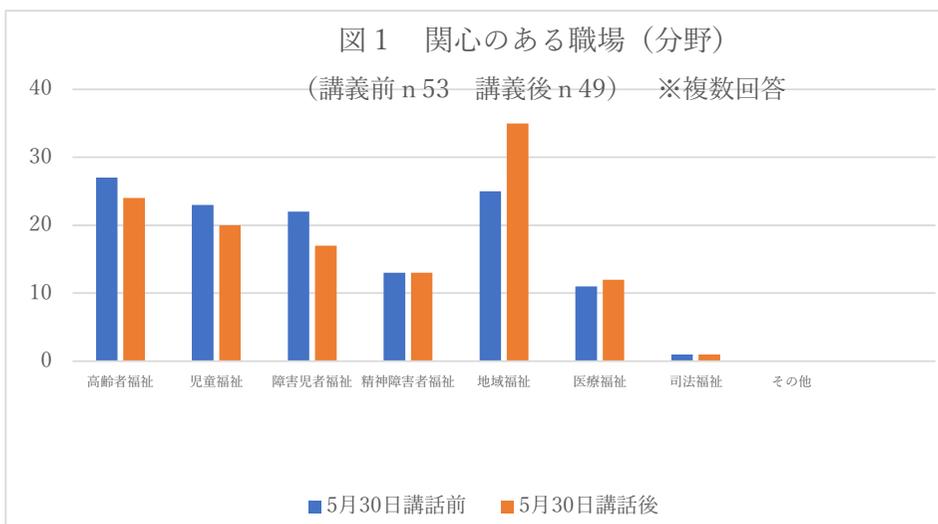
②地域包括支援センターの仕事への理解度について

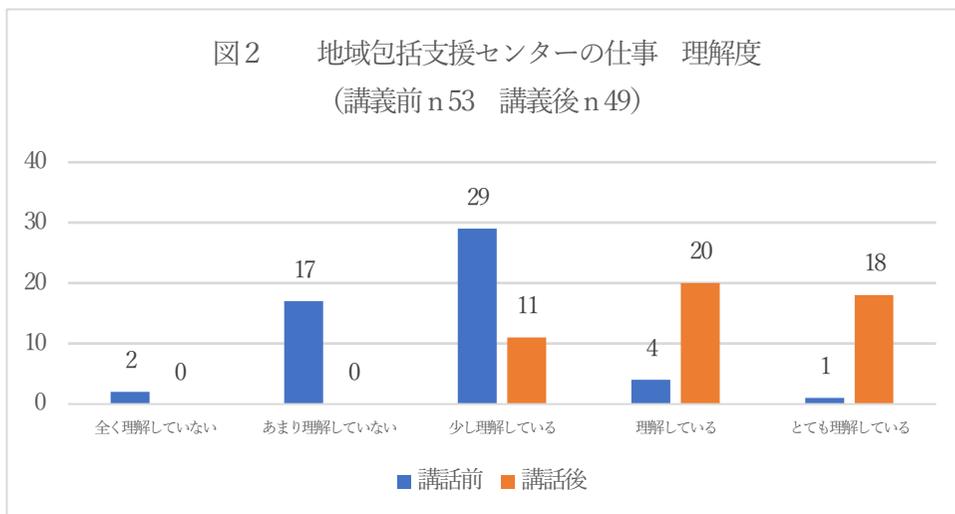
・講義前後

回答者数は 53 名であった。全く理解していない 2 名、あまり理解していない 17 名、少し理解している 29 名、理解している 4 名、とても理解している 1 名であった。

・講義後

回答者数は 49 名であった。全く理解していない 0 名、あまり理解していない 0 名、少し理解している 11 名、理解している 20 名、とても理解している 18 名であった（図 2）。講義後に、理解度が高まっている。

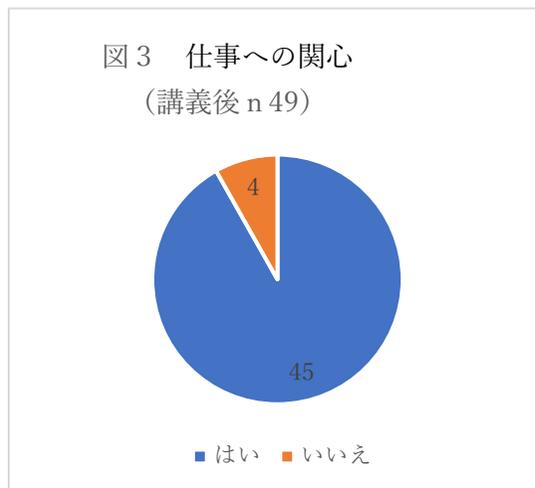




③地域包括支援センター（社会福祉士）の講義を聴いて、もっと深く知りたいと思ったかについて

・講義後

回答者数は49名であった。「はい」45名、「いいえ」4名であった（図3）。この質問項目は、講義後のみであったが、多くの学生がもっと深く知りたいと回答をしている。



2) 1年生

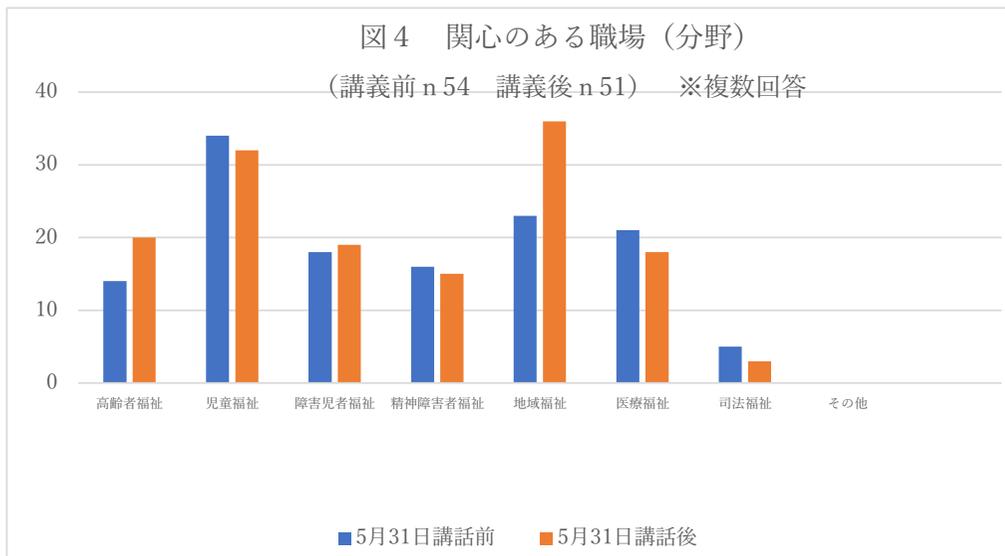
①関心のある職場（分野）について講義前後 ※複数回答

・講義前

回答者数は54名であった。高齢者福祉分野14名、児童福祉分野34名、障害者福祉分野18名、精神障害者福祉分野16名、地域福祉分野23名、医療福祉分野21名、司法福祉分野5名、その他0名であった。

・講義後

回答者数は51名であった。高齢者福祉分野20名、児童福祉分野32名、障害者福祉分野19名、精神障害者福祉分野15名、地域福祉分野36名、医療福祉分野18名、司法福祉分野3名、その他0名であった(図4)。講義前と比較すると、高齢福祉分野、地域福祉分野への関心が向上している。



②地域包括支援センターの仕事への理解度について

・講義前

回答者数は54名であった。全く理解していない2名、あまり理解していない29名、少し理解している19名、理解している4名、とても理解している0名であった。

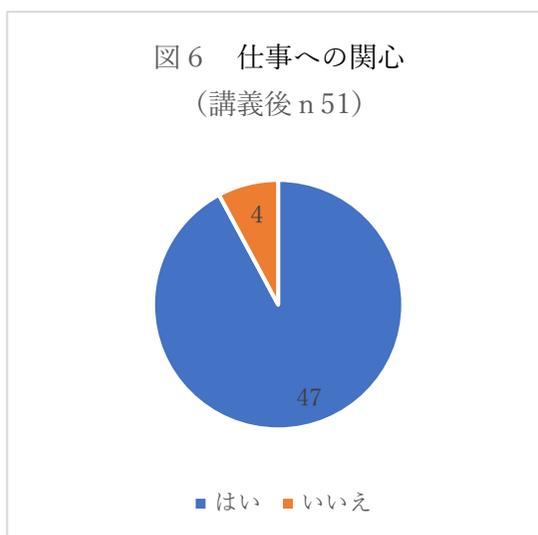
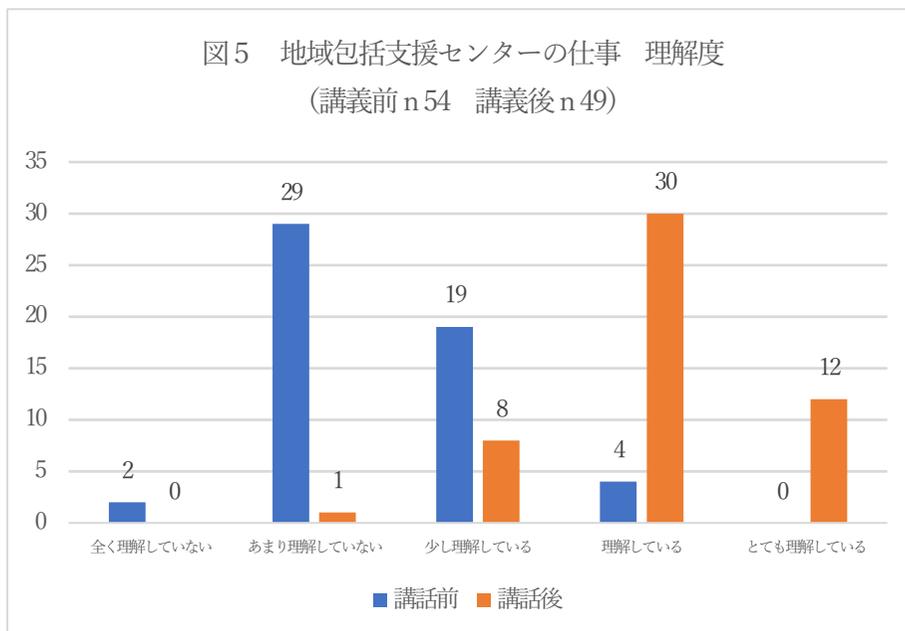
・講義後

回答者数は49名であった。全く理解していない0名、あまり理解していない1名、少し理解している8名、理解している30名、とても理解している12名であった(図5)。講義前は、あまり理解していない学生が多かったが、講義後は、理解しているが一番多く、次いで、とても理解しているの選択が多く、理解度の向上が示唆された。

③地域包括支援センター(社会福祉士)の講義を聴いて、もっと深く知りたいと思ったかについて

・講義後

講義後の回答者数は51名であった。「はい」47名、「いいえ」4名であった(図6)。多くの学生がもっと深く知りたいと回答をしている。



IV. 考察

学生の関心のある職場（分野について）は、1年生は、17.6%から25.1%、4年生においては20.4%から28.6%とどちらの学年も講義後は地域福祉への関心が高まっていた。地域包括支援センターの仕事への理解度について講義前を比較すると、1年生は「全く理解していない・あまり理解していない」が57.4%、4年生は35.8%であった。これは、大学での学びが理解度の向上につながっていると推察できる。また、地域包括支援センターの仕事の理解度は、講義後「少し理解している・理解している・とても理解している」と回答した割合が、1年生82.4%、4年生は100%であった。1年生においては講義前に

地域包括支援センターの仕事を全く理解していない・あまり理解していないが31名であったのに対し、講義後は1名に大きく減少していた。1年生に福祉専門職の1つである地域包括支援センターの仕事について理解度を深めるには有効な活動であったことがわかった。

V. 今後の課題

本学の取り組みであるBMS（Bunkyo Management System）において学生のキャリアへの関心を早期に高めることを目的とし、ゲストスピーカーによる講義を実施した。結果、学生のキャリアに対する理解度・関心度は向上した。しかし、今回のアンケート調査から各学年においてどのような就職プログラムが必要であるかは明らかにならなかったため、今後も調査内容を検討する必要がある。また、就職支援の満足度を検証するにあたっては、調査項目の精緻化が重要になる。

今後も感染症対策が求められる状況は続くことが予測される。そのため学科だけではなく、全学科を対象にしたイベントを企画する就職課と協力し、学生の就職支援の満足度を就職向上する取り組みが課題となるだろう。

参考文献

- 1) 平成24年版 子ども・若者白書（全体版） - 内閣府
https://www8.cao.go.jp/youth/whitepaper/h24honpenhtml/html/honpen/toku_2.html
(2023.3.5閲覧)
- 2) 溝口 侑, 溝上 慎一 (2020) 「大学生のキャリア発達とロールモデルタイプの関係ーロールモデル尺度 (RMS) の開発の試みー」 青年心理学研究, 32, 17-36.
- 3) 田中 秀和, 立花 直樹 (2012) 「高校福祉科と福祉職の職業像ー福祉人材確保に向けた一考察ー」 新潟医福誌, 12 (2), 88-94
- 4) 坂井 晶子, 太原 牧絵, 河内 佑美 (2021) 「人間福祉学科における就職支援に対する満足度向上のための施策の策定と実施・検証についての報告」 広島文教大学人間福祉研究, 19, 33-43